

働きすぎ黒書 ニュース

全日本教職員組合（全教）生権局

2006年12月22日

東京都千代田区二番町12-1 3F

「うちの家庭も限界…」同僚の目はうるんでいた

長野・高校教員

「わたしにやれっていうの？」トゲのある怒りを含んだ声だった。

彼女は40代、中学生の子どもと夫の朝食と弁当を朝早く起きて作り、8時前から学校で朝練、そして授業をし、教科主任と学年主任の仕事をこなした後、放課後のクラブを見ていた。

土日を含め学校や家庭生活に余裕がないことは重々わかっていた。けれど、クラス減が3年続いて6人もの同僚が削減された今、生徒指導の主任を来年できそうなのは、キャリアといい、力量といい彼女しかいないと、校務分掌委員長の僕は思った。僕も、3年のクラス担任を持ち、自分の学年の卒業式委員長を務め、日勤・準夜勤が当然の部の顧問をやり、生徒会の主任等々をやっていた。

「もうウチの家庭は限界なの！」彼女の目は赤くうるんでいた。僕も涙声になっていた……。

「わかりました」でも、心の中ではこう言っていた。（ウチはもう限界をこえてんだよ！）と。

そして僕は来年、生徒指導の主任をやることになった。

明日までに、卒業式の生徒会部門のプリントをつくらなくてはいけない……卒業式委員会と3年全体集会の進行表も……そして、みんなが楽しみにしている卒業式用のビデオ編集の指導も……。気がおかしくなりそうな自分を励ます？壊す？ためにウイスキーをあおった。

気づいたら僕は病院のベッドの上にあった。家族もよばれたとのことだった。200X年 月 日のことだった。今も 病院へ行けばカルテは残っているだろう。

僕は今、シングルファーザーとして、失ったものを噛みしめつつ、まだ教員をやっている。

校務分掌：生徒指導、進路指導、生徒会担当などの任務